

第1回新宿区次世代育成協議会概要

平成17年6月23日(木)午後2時

区役所本庁舎5階 区議会大会議室

1 開会 区長あいさつ

2 委員委嘱

3 議題

(1)報告事項

- ア 新宿区次世代育成協議会の概要について
- イ 新宿区次世代育成支援計画の概要について
- ウ 平成17年度の事業計画について

(2)協議事項

- ア 副会長の選任について
福富 護(東京学芸大学教授)を選任
- イ 部会の設置
希望を取り7月中に決定する・

(3)活動発表

私の経験と子育て支援へのかかわり(委員)

私が選ばれているのは「新宿区学童保育連絡協議会」で新宿区内17の学童クラブ父母会の集まりです。私が子育てできたのは、区立保育園、学童クラブのお陰だと思っている。子どもたちが歳なりに成長しているのは、児童館や学童クラブに異年齢の子どもたち群れている集団があるということ。その中で自然にお互いの色々なぶつかり合いが生まれてくるのが学童クラブではないかという気がする。学童クラブや児童館の活動はなかなか知られていないのですがパンフレットをお読みください。この中の事例を多くの方たちが共有化してどういう支援が今大事なのか、意外とプライバシーの問題がありお互いに事例に触れて地域で学びあうことができないできていると感じている。

私が関わってきた薬王寺周辺の子どもたちの周りにはある色々な団体の関わり方を私なりの視点で言えば、活動を一生懸命やっていく中で子どもたちがどのように楽しめるかをやっていくと、地域との関わりが出てくる。ところが小学校と学童クラブがつながっているようになっているが、なかなか小学校からのアプローチはない。

学校を安全な居場所づくりということで活動始まっているが、子どもたちの放課後というものを学校側がどの程度認識しているかまだまだ足りないと感じてい

る。学校を含めて地域で居場所について幅広く考えてほしい。結局、予算が下りてきて学校で事業を始めるとPTAが下請け機関になり予算消化で事業をやっている状態である。私たちの行事は、バザーをやってお金を作りながらやっている。予算の目的だとかどこでやるということがみんな決まっているので地域で実際に使えない状況がある。

もう一つは、女性をもっと応援されなくてはだめだと痛感した。“ゆったりーの”に関わって思うのは母親たちに余裕がない。子どもたちがちょっと思うようにいかないと、親がこんなんでいいんだろうかと思ひ込みすぎる。親が何とかすれば何とかなるんだと思ひ込んで非常に焦っている状態のところがある。一人一人話してみるとその気持ちを出せる場があればお互いつながって助け合っていくという姿勢に変わるんじゃないかと思う。そこで、大人の交流会というのも“ゆったりーの”で始めた。

区立小学校PTA連合会（委員）

新宿区次世代育成支援計画の中で子どもの遊び場、居場所の充実について重点項目になっている。事業については資料参照。

ア 居場所事業

次世代育成支援計画の中で『目的 平成16年度より各中学校とその学区の小学校を1ブロックとし、放課後及び土曜、休日などに学校施設を利用して子どもの居場所作りを行い、学校施設の開放と活用を図る』ということで、中学校を基本単位とする地区毎で実施している。一方で各学校単位毎で行っている方が多いというのも現状。その理由として、中学生と小学生の興味、関心の違いから一緒に同じイベントをするのは難しい。また、学校選択制の導入で学区の中学校が決して身近な学校とは限らないと考えられる。

実施主体は、PTA中心で開催しているところが多いが、PTA役員にかなりの負担がかかるということで、PTA役員の中でボランティアの保護者が中心となったり、日本レクリエーション協会に任せたり、父親の会の協力が大きく父親の子育ての参加にいい機会となっている。

問題は、参加する子どもの数が少ないことと、私立学校に通う子どもも含まれているが全体に浸透していない。その学校に通う子どもしか参加しない現状もある。

イ 家庭教育学級

次世代育成支援計画の中で『目的 少子化、核家族の進行による家庭の子育て力の低下に対し、PTAが主体となり、家庭教育学級、家庭教育講座などを開催し、家庭の教育力向上を図る』ということで、講演内容もそのようなことを意識したものをやっている。働いている母親、また、父親も子育てに協力する重要性から父親の参加しやすい内容、日程設定が必要である。参加者が少な

いことも問題になっている。

価値観が多様化して、家庭方針もそれぞれ違っているが、家庭教育の基盤は確固としたものがあると思うので、親が自分の子育てに対して振り返る意味でも、家庭教育学級は意義深いものとなっているので、より一層充実を図っていかうと考えている。

ゆったりーの（委員）

この事業は区民と区との協働で、昨年1月からワークショップを初め10月1日オープンし協働で始めて、運営は区民だけで行っている。（内容は資料参照）運営委員は区民の、ワークショップの頃から参加している約16～17名で運営している。今年の4月から週5日の開所になり参加者も徐々に増え1日の利用者も時には100名弱の時もあり、現実には運営委員は大変な思いをしている。ボランティアを募集しているが、人員を確保することが一番の課題である。

在住外国人の子どもたち（委員）

次世代育成支援計画の中に外国人の問題が含まれていないので、関わっている人間として聞いていただきたい。“外国人のための親と子の日本語教室”を行政の支援の基、子育て中の外国人の居場所づくりを目的に実施している。新宿区では10%が在住外国人でその子どもたちも次世代だということを認識しなければならない。その中で特に問題なのは子どもたちの教育であり、学校に通っている子どもはいいが、表に出てこない“不就学”の子どもたちの教育をどうするかも問題である。

在住外国人の子どもたちも次世代の子どもと捉えて、この協議会の中で考えて頂きたい。

子どもの居場所づくり（委員）

学校の5日制に伴い子どもの居場所づくりとして“みんなの部屋”をスタートした。青少年活動をしている団体が、色んな形で目的を同じにしながら個々に色々な事業を展開していることから、連携できるものは連携して一緒にやっている。（内容は資料参照）中学生が興味を持ってくれる事業を展開するのが難しい。

「新宿子育て情報局」「四谷冒険遊びの会」（委員）

「新宿子育て情報局」これは新宿区の呼びかけで“区民とつくる子育て情報局”という取組みによって運営しているホームページです。名前は『イバンピーニ』と読み、イタリア語で“イルバンピーノ”（子どもらしい）が由来で、“イルバンピーニ”で子どもたちになるそうです。母親や、子どもたち、家族にとっていい情報、いい環境、いい関係でありたいとの願いを込めて活動している。

「四谷冒険遊びの会」は、自分の責任で自由に遊ぼうをモットーにした子ども

たちが主役の遊び場で、自然、水、土、木や火に触れ、汚れても危なくとも冒険し、挑戦し、おしゃべりしたり、けんかしたりできる場がプレイパークである。四谷では昨年の春に信濃町児童館の思いと私たち居場所についての語りからプレイパーク活動の思いが一気に動きが始まり発足した。プレイパークではプレイリーダーと呼ばれるお兄さんの存在が特徴を持ち、遊び場をサポートし、相談に乗るのはもちろん、遊びに来た子どもたちを結びつけ、遊びの環境を作り、他の大人から子どもの遊びの自由を守り、プレイパークを知らせるスピーカーの役目もあり、自ら遊ぶ人でもある。この人材を確保することが課題でもある。

(4)意見交換

会長より

居場所づくりの補助金は、文科省の国の補助金で入ってくると、こういう目的でこういうものならば費用が出るとか、何かあると思う。私たち現場から見ると縦割りの流れと私たちの子どもたちが総合化していった方が、より効果的につながるという部分があると思う。国からの補助金じゃなくてそういうお金を財源として自治体に移したほうが現実的に即した形で効果的に使えると色々なところで言ったりしているが、今、そういった使い方で、そこから出てくる問題点、どうつながっていったらいいのか、どう不便なのか、意見交換しながら教えてほしい。

委員

“ ゆったりーの ” の決算書について補助金収入と寄附賛助金が多い。モデルケースなので一つの形を作り上げていく過程ではいいが、このような形のものがいくつかできていく中で、今後この支援活動に対してきちんとした流れを作る必要がある。

事務局

“ ゆったりーの ” 決算については、昨年の状況ということでオープン時の助成金、寄附、賛助金だった。平成 17 年 4 月からは集いの広場の委託事業として新宿区からお願いしている。この補助金というのは週に 2 日、3 日と徐々に回数を増やして頂いたときのひろばの助成金として支払ったものとなっている。今後も増やすことができれば直営でやっているものだけではなく増えていくことが、子育てをしている方にとってはいいことだと感じている。

委員

このような形の補助金が同じような形態で続くか問題。色々な地域の要望を聞いて新宿区全体に渡ってより良い方向にいてほしい。

会長

次世代育成支援計画の中の親子の場、そういった情報交換の場、そのようなものを区の施策として公設で作っているもの、色々なものがある。“ ゆったりー

の”に関しては委託事業に切り換えたということは、区として行う事業をやっているという位置づけ。今後、区全体でそういった事業をトータルでどう展開していくのかを見えるようにしていくことが大切。

委員

関わっている者として、これだけ来所者が多いというところは評価してほしい。協働でやった事業が次の発展のためのモデルであると同時に発展していくものになっていければいいと思う。一番の問題は経済的なもので、ボランティアで働いている部分が多く負担が大きい。経済的裏づけが一番重要。

委員

関わった人たちの意見はそのとおりだと思う。こういう形のものが新宿区に何箇所かできることが理想だと思う。ただ、問題はどうしても金銭的なことに関わっていくと思う。だけど、今思い切って国もそうだが、なるだけそういうものにお金を出してもらって少子化の歯止めをしなければならぬ時期に来ていると思う。

委員

“ゆったりーの”も自前で色々なところから寄附をもらったりしているが、専門的にやるスタッフがない。もう少し金だけではない支援がほしい。また、区ももう少しノウハウを作って、企業からお金をもらうとかしてほしい。

委員

次世代育成は新宿区の将来を担う大変大事なことで、三つのことを強調したい。

- ・夢のある教育を子どもたちに与えたい。地域では小学生以下の子どもたちに夢のある活動をしている方々を支援してほしい。学校教育の中でも夢のある教育をしてほしい。

- ・安全、安心なまちづくり。性的情報に関する規制や規律を再検討したり、青少年がもっとスポーツをなど他のことで活用できる場を作る。

- ・人をいたわる心を育むこと。人をいたわると同時に自分の命も大切にする。小さい内から身に着けることで頭ではなく身体で分かっていく。

会長

いままでの意見等を、これからの部会の活動の中でつなげてほしい。

4 児童虐待の現状と都京都の取り組みについて

東京都児童相談センターより報告（飯山所長）

都内 11 箇所のセンター、相談所で受け付けた件数を見ると、電話相談を除く一般相談は子どもの数が減ってきているにも関わらず、家庭で子どもを育てるのは難しいという養護相談が傾向的に増えている。そんな中で虐待相談は 12 年度は 1739 件が 16 年度は 2746 件の相談を受けている。非行相談も 15、16 年とじり

じり増えている。全国で虐待相談が3万件処理件数を超えたという報道があったが、東京都の場合も処理した件数でいくと15年度の虐待相談が2200件だったのが、16年度は3200件と大幅に増えた。なぜ増えたかということ、昨年1月末に大阪の岸和田事件があり、その影響で2、3月は一気に増えた。2、3月は特別ですが、全体を見ても16年度の方が増えている。これは、「児童虐待防止法」が改正になり、今までは虐待を認めた場合に通告するという義務が、虐待が疑われる場合も通告する義務があると義務の範囲が拡大されたためである。それから「児童福祉法」も改正があり、今まで児童相談は、児童相談所を設置している都道府県ないし、政令指定都市の専管的な事項だったのが、4月から区市町村も相談を受けるようになった。虐待の通告も区市町村で受けるように変わった。各区の「子ども家庭支援センター」が受けることになるとは思います、協働して仕事をしていきたいと思う。

非行に関しては、今、少年法が改正の方向で国会で議論されている。もっときめ細かく警察の方で少年事件に当たっていかうということと、警察と児童相談所が協力し合って、お互いの谷間に子どもたちが落ちないように気を付けていかなければと思っている。非行相談で困っていることは何か、全国の児童相談所で調査した結果、親の非協力、子どもが面談を受けることを拒否する。学校が非行児童を排除する傾向があるというものだった。実際の子どもの個々の調査となると非行を行った子どもの内3割が虐待を受けていたと、虐待というものが、子どもが被害者だったのがあるとき外に向けて力を振るうようになって、非行という形になり、子どもが加害者になるという傾向がある。

児童相談所は、子どもの上に起きている様々な事象、これは子ども自身の性質の問題、気質の問題、家庭環境の問題もあるが、そういった諸所の要素を総合的に見て、その子ども、家庭が社会生活に適應できるようサポートする機関で、区市町村とも緊密な連携を取って、一緒に働くという協働の姿勢で仕事をしていきたい。そういった場合には、これだけの方が集まっているこの協議会というものが大事な要素となると思う。

5 学識経験者のコメント

(増田先生)

公的な協議会で非常に具体的な実践事例が発表され、実際に子どもたちが、保護者の方たちが、地域が、どのような動きをしているのかということが共有できる会ということに非常に感動した。こういう積み重ねが非常に大事だと思う。この協議会が青少年問題協議会と次世代育成対策が統合されたことの意味が非常に大きいと思う。それぞれがやっていることが役所の縦割り行政をもっと広げていくと同時に、世代間の伝承、今、育てられている子どもたちが、今度

は自分たちよりも小さな子ども、地域の人たちに関心を持っていくという形での伝承づくりが、今回の施策の中心にできたらいいと強く思った。

事務局にお願いは、部会の構成で事務局の提案は一つの理念、事務局の考え方が含まれていると思うが、まだまだ縦割りの色合いが強いかなと思う。そのあたりも十分に検討し皆の希望と両方合わせていい部会にしてもらいたい。

(福富先生)

この次世代育成という形へ、青少年問題協議会が発展的解消するという相談をされて、本当にどうだったのか懸念していたが、皆さんからの発言を受けてやはり良かったんだ、問題に対する協議会というよりももっと前向きに次世代をつくるという積極的な会ということで新宿区がもっと発展できるのかなとホッとして頑張らねばと心新たにした。

ただ1点だけ、おそらく言葉の綾だろうけれど、「家庭であきらめてもらっている」とか、一所懸命地域のことに係わっていることが自分が犠牲になっているというのではなく、それを乗り越えて、係わること自身が楽しみだという気持ちで関われるようになれば、犠牲ではなく、大人が楽しむということが子どもにとって一番前向きであり、子どものために何かやってやるんだという気持ちではなく、自分が楽しむという発想に変えることが大人と子どものいい関係なのかなと思う。

一緒に素晴らしい新宿区を、東京都を、そして日本ということをここから発信できればと思っている。